細やかな独自の単元評価などで生徒の意欲引き出し学力向上

山形県酒田市立飛鳥中学校

公益財団法人パナソニック教育財団の平成23年度第37回実践研究助成特別研究指定校の山形県酒田市立飛鳥中学校（渡部俊明校長、生徒数162人）では、生徒の学習意欲を引き出す学習システムの構築と授業改善に取り組んでいる。同校独自の単元評価の制度は、学習の振り返りがしやすく、生徒が自らの学習状況をこまめに確認して修正することができ、学習への取り組み方が良い方向に変化しているなどの成果がみられている。また、一人ではなかなか学習が進まない生徒を対象に「Pravate Teacher制度」や、単元の未達成者が学び直すための「フェニックスタイム制度」など、きめ細かで落ちこぼしのない支援制度が充実している。同校の実践研究は3年目を迎え、生徒の自己認識から学力向上へとつなげていくサイクルが創りあげられている。

公益財団法人パナソニック教育財団の今年度実践研究助成特別研究指定校から

■単元評価のしくみ

同校は独自の単元評価制度を実施している。単元の始まりには、学習マップが配布され、単元全体の見通しが教科担任から説明される。学習マップには、授業ごとの学習課題が記入されており、生徒は今日の授業の学習課題を明確にした上で授業に参加している。

教科担任は、生徒が考えたことやほかの人とは違う気付きなどを積極的に発表するなど、授業に意欲的に取り組む姿や態度を見取り、生徒の単元ごとの評価に反映させている。この単元評定は、例えば、国語は「関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「知識・理解・言語」について、実施される。

単元の終わりには単元テストが実施される（音楽・美術を除く）。テストの返却後、生徒は学習マップに得点を記入する。小テストなどの結果や「単元学習を終えて」の感想を記入後、教科担任に学習マップが提出される。教科担任は学習マップに単元評定を記入し、返却する。

日々の学習・評価活動と状況把握の機会によって、生徒は学習の見通しを持ち、学習到達状況をとらえることができるようになってきている。生徒の中には、さらに深く学ぼうとする意欲や、改善するために努力する生徒もみられる。一方、教科担当者は個々の生徒や学級の学習の課題を明確にとらえ、その上で日々の授業に臨むようになってきている。

このように「学習マップ」を介して、生徒と教科担当者との間で学習コミュニケーションが生み出されている。

■教科担任がパソコン上の学習評価シートに入力

学習評価シートには、①学習到達度②活動評価③学習規律④提出物⑤小テスト⑥単元テスト⑦単元評定――の7項目がある。

このうち、「学習到達度」は、生徒による自己評価、単元終了後の「学習の振り返り」と、教科担当者による授業での学習状況から評価される（達成した場合は「○」を、未達成は「△」をつける）。

生徒が教員と学習状況を一緒に確認をするガバナンスタイム

「活動評価」は、授業の中で、学びの価値が高い姿を観点別に評価したもの。「知識・理解」「技能」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」について、教科担当者が見取り、評価する。授業改善とともに今年度の評価改善の重点項目の1つに位置付けられている。

「学習規律」は、基本的な学校生活の習慣を育てて、学習集団にとって、より良い環境づくりのために行われる。チャイム前着席や授業中の私語・居眠り・本読みなどの態度について、注意を重ねても改められなかった場合には、その単元内に限り、マイナス評価をする。

「提出物」は、期日までに提出でき、内容がおおむね良好なものには「○」。内容に不備があったり、提出日が守れなかった場合には「△」。未提出は「●」。評価後での提出の場合には「●△」で、状態を記録し直す。

「小テスト」は5教科の単元ごとに、必ず授業中に実施されるもの。生徒は小テストの正解数を学習マップに記入し、回収する。その後、教科担当者が記録用の「学習評価シート」に転記するとともに、パソコンから成績管理データベースに入力・蓄積される。

このようなきめ細かな学習指導と評価活動を実施した後、まとめとして単元テストが実施される。テスト結果は、教科担当者により、成績管理データベースに入力・蓄積される。

単元評定は、単元の評価項目を総合的に判断し、3が「十分達成」、2が「達成」、1が「未達成」の3段階で評価される。

同校では平成21・22年度に同財団の一般実践研究指定の助成を受けて、独自の学習評価システムづくりに取り組んできた。2年間の試行錯誤の成果として学習評価システムが確立しつつある。学力向上への仕組みとしてとらえ、システムの見える化を図り、生徒の自己認識から生徒の学力向上へとつなげていき、学力が向上していくというサイクルを創りあげることができつつある。これがスパイラルに向上し、「学び方を学ぶ」というメタ学習につながる仕組みになっている。

■学習習慣づくりときめ細やかな支援が学びの意欲を向上させる

単元の学習が終了した時点で、評定が1の段階にある生徒を中心に、学び直しの「フェニックスタイム」（FT）が設けられている。FTは火・木曜日の6限目に計画されている。夏休み（5日間程度）と年末休み（2日間程度）にも集中的に実施される。

受講は希望制で、評定1の生徒のための「基礎講座」のほか、教科の理解をさらに深める「発展講座」が設けられる。基礎講座で改善状況がみられた生徒は、評定を2の段階に上げられる。

また、同校では、学習計画づくりによる家庭学習習慣の定着と生徒の主体的な学習態度を育成するため、「ブラッシュアップタイム・ノート」（BUノート）を作成し、使用している。

この冊子は「学習計画表」の1学期分を冊子にしたもの。このノートを使った学習計画づくりの時間が教育課程に位置付けられているのが、同校の特色の1つ。主体的に学習する生徒の育成には、計画段階から消化不良を起こさないようにすることが重要なためだ。昨年度から冊子の形式にしたことで、それ以前のプリント方式よりも生徒がより活用しやすくなったという。

生徒の意識高揚を図ることを目的に「家庭学習習慣強調週間」が設けられている。この期間中には範となるBUノートを掲示し、副賞（ノート等）を与え、賞賛される。

この取り組みと連動して、一人ではなかなか学習が進まなかったり、学習の仕方が分からない生徒を対象に、学習相談と個別支援を行う「Pravate Teacher制度」（PT）がある。

この制度を利用する生徒と担当の教員は、毎週月曜日の放課後に学習相談を行い、1週間の学習の進め方を確認する。このほかにも、学期初日の終わりの会のあとに、生徒と担当職員が面談する一斉の「登録日」を設け、この機会に、学習に取り組む意識づけを図っている。

生徒からは「単元評価は単元ごとの1つ1つの勉強を重点的にしっかりできたり、どこがわからないかなど細かく理解できたりするところが良いと思う」「単元ごとにテストをしていくので、テストに向かう姿勢を練習することができる。単元ごとの評価されるので、その結果を踏まえて、次の単元に進むことができる。単元評定では提出物などの確認もできる学習マップは、学習の流れが分かり、途中で見たりできる。単元が終わると評価が戻ってくるので、自分の学習状況が細かくわかり、頑張ろうと思うことができる」など。

主体的な学習態度を育成するためのブラッシュアップノート

と、学期ごとの評価よりも短期間に学習状況の把握し、すぐ修正ができる点が生徒に好評だ。

■今年度は授業改善に重点

今年度の実践研究は、学習評価システムの充実に加えて、毎時間のねらいを明確化した各教科担当者の授業スタイルの確立することに重点が置かれている。この「授業改善」は、①授業展開を工夫し、活動場面を設定する②学びの価値の高い姿をとらえ、伝え、広げる③本時の目標達成度の確認をする――といった3つの項目を意識して進められている。

さらに、評価システムの改善点として、ペーパーテスト以外の授業過程を通しての評価方法（パフォーマンス評価）を重視している。パフォーマンス評価は「知識」のようなペーパーテストでは測れない学力を拾い上げ、生徒の意欲と学力の向上につなげていく取り組み。主に「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」の観点を見取ろうとしている。教科担当者間で、これらの観点の見取りについて共通意識を持てるように、現在、授業研究会などの機会に検討を重ねているところだ。

今年度から全生徒を対象に、生徒が自己の学びを振り返り、学習到達状況をとらえ、全職員による指導・助言を通して生徒の主体的な学習態度や生活の確立を促していく「ガイダンスタイム」（GT）も実施されている。

GTは年間3回程度（5月、9月、12月）に実施されるもの。簡単な記録を残し、ファイルにとじて教科担当者が一括保管をする。さらに必要と認められた場合には、随時、学級担任などが相談に応じている。教員と一人ひとりの生徒が、パソコンを開きながら、教学習状況を一緒に確認をする。教科担当者は、必要に応じて、今後の学習の見通しや重点項目などを指導・助言している。

同校の渡部俊明校長は「今年度は授業改善に重点的に取り組み、単元評価による学力向上をより確かなものにしていきたい」などと語った。